

周辺からの記憶

3. むつ、下北半島

村本邦子（立命館大学）

2014年5月、縁があつて、上海で開催された国際心理療学会のシンポジウムで、震災プロジェクトの報告をした。漫画パネルの英語版を作成し、学会期間中、パネル展示も行った。急な事情で一足遅れて中国入りした中村正さんが、布に焼いたパネルのはりつけをしてくれたのだが、手伝ってくれた中国人スタッフが、漫画の物語について話しているうちに、日中戦争のことについて議論を始めたのだそうだ。これまでやってきた南京プロジェクト（日中の三世代のための修復プロジェクトで、中村さんも昨年9月の南京ワークショップに参加してくれた。詳細は、立命館人間科学研究所のHPからダウンロードできる。『日中の戦後世代を対象にした新たな東アジア型歴史・平和教育プログラム開発』<http://www.ritsumeihuman.com/publications/read/id/104>）のことを紹介すると、態度を変えて、握手を求めてきたそうだ。しばしば無力感に苛まれつつ、それでも続けてきたことの意味を感じる瞬間である。戦争も震災も根底でつながっている。それが歴史というものだ。

学会には優に千人を超える参加者が集まったが、多くの人たちが漫画パネルの前で、ひとコマずつ携帯で写真を撮っていた。「日本の漫画セラピーとして売り出そうか!？」などと言っていたのだが、本当のところ、その内容がどこまで届いたかは不明である。投影法の逆で、ある種の刺激を自分のなかに受け入れることで、そのことがもたらす影響を享受することができるし、それを誰かと共有することができれば、また新しい波動も生まれる。どちらかと言えば、静かに一步引いて見る文化において意味を成すものかもしれない。力強く前へ前へと進んでいく今の中国では伝わりにくのではないかとも思ったが、少なくとも、漫画という形式は関心を惹いたようだった。来年の3月には、ニューヨークでも漫画展をするというから、団さんの漫画も今や国際的になったものである。

日本と同じく、精神分析から認知行動療法、クリエイティブ・アートまで、ありとあらゆる技法の発表があつたうえで、最終日のまとめは、「心理療法には限りがあるが、人生には限りがない。難しく考えず、ユーモアを使って楽しくやろう！」だった。これには思わず笑ってしまったが、なかなかよいではないか。アジアン・パワーである。

(2014年5月)

1. むつ

むつ市は、本州最北端、青森県北東部の下北半島に位置し、南北約 35 キロ、東西約 55 キロにわたる。三方を海に面し、北は津軽海峡から北海道を望み、西に平館海峡、南に陸奥湾を抱える。恐山山系の外輪山を形成する釜臥山を中心に、東部はなだらかな地形が広がり、北部・西部は自然に溢れ、緑豊かな山地や台地が海岸近くまで迫る山岳地形である。広範にわたる地域が下北半島国定公園に指定され、恐山、川内川溪流などの景勝地や、湯野川、薬研などの温泉が点在するほか、陸奥湾のホタテ、津軽海峡のイカなどの海の幸が豊富で、豊かな自然の恵みを受けた地域となっている。(むつ市 HP 参照 <http://www.city.mutsu.lg.jp/index.cfm/1.html>)

平成 22 年（2010 年）の国勢調査によれば、人口 61,066 人、県人口の 4.4%で、平成 17 年国勢調査人口より約 2,900 人減。就業者総数に占める第 3 次産業就業者の比率は約 71.6%で、これは県平均 64.6%を上回り、サービス業、卸売業、公務員等を中心とした下北圏域の中核都市としての業務機能が集積していることを示す。就業者総数は平成 17 年から 2 万人台に減少しており、人口の減少や少子・高齢化の進行に伴い、さらに減少することが予想されている。特に、第 1 次産業の減少が顕著であり、将来の人口推計の動向を踏まえれば、後継者対策も課題になってくるということである（「おでかけ市長室」むつ商工会議所版）。

東日本大震災のプロジェクトなのに、「どうしてむつ!?!」と不思議がられることがある。そもそも、このプロジェクトのアイデアは、むつ市立図書館から生まれ、毎年、青森県から東北 4 県を南下していこうというものだった。私自身は、まったく、むつとは縁がなく、「一度、恐山に行ってみたいな」というのと、「原子力船むつというのがあったな」と思い出す程度で、それとて詳しいことを知っていたわけではなかった。むつと関わるようになってわかったことだが、このプロジェクトがむつから生まれたのは、おそらく偶然ではない。前提として、立派な図書館、企画の少なさ、人々への思いという条件があったからだ。

この原稿を書くにあたって、むつ市の HP をチェックしていると、昨夜（2014 年 5 月 19 日）21 時 39 分に、宮下順一郎むつ市長が急逝したというニュースが眼に飛び込んできた。62 歳、くも膜下出血だったそうだ。むつ出身の市長は、初めから立命館のこのプロジェクトを歓迎してくれていると聞いていた。実は、前杉山市長も、平成 19 年（2007 年）に急逝していた。8 代市長として就任以来、6 期 22 年にわたってむつ、下北を牽引するリーダー的存在であり、原子力船むつとの「共存共栄」を図り、国内初の使用済燃料中間貯蔵施設の誘致、市本庁舎の旧大型商業施設への移転など、多くの政策に取り組み、これを受け継いだのが宮下市長だった。

HP むつ市概要にある「激動と苦難の 50 年」を見ると、たしかに、波乱万丈の歴史が実感される。むつ市は、昭和 34 年（1959 年）、下北地方の政治、経済、交通の中心地とし

て成長してきた田名部町と、海軍水雷団の設置から自衛隊の基地として発展を遂げた大湊町が、大湊田名部市として合併し、翌年、全国初のひらがなの市として誕生した。大きな財政赤字を抱え、「人口 10 万人の田園工業都市」を目指して、企業誘致に力を注いだ。夢を託した「むつ鉄鋼」も頓挫し、ほとんど成果を上げることができなかった。主要道路網と航路の整備、鉄道存続への闘い、昭和 40 年代から 50 年代初めにかけては相次いで大災害に見舞われ、市の財政をさらに圧迫と書かれている。昭和 43 年（1968 年）、下北半島国立公園に指定されてからは、観光地としての期待がかけられ、恐山への参拝観光コースが整備され、平成 17 年（2005 年）の新むつ誕生によって、自然満喫型観光のための面積が拡がり、現在は農林水産物のブランド化に努めているようだ。さらに、「市の発展は人材育成から」と学校・社会教育の充実を図り、その一環として、最新の施設を備えたむつ市立図書館が平成 12 年（2000 年）にオープンしている。これが漫画展の会場となっている図書館である。

その後、原子力船むつと使用済核燃料中間貯蔵施設の誘致のことが書かれている。日本最初の原子力船むつは、昭和 47 年（1972 年）に原子炉が完成、大湊港から出航するが、実験開始後まもなく放射線漏れを起こし、受け入れ先が見つからず長く漂泊した後、最終的にむつ市根根浜定係港に回航された。その後、解役となり、船体を 3 つに切断、原子炉部分を撤去し、大改修を施して、海洋地球研究船「みらい」に生まれ変わって活躍中とある。使用済核燃料中間貯蔵施設に関しては、「誘致までの軌跡と地域との共生」として、その経過が記されている。平成 12 年（2000 年）に調査依頼、平成 19 年（2007 年）に許可書申請、平成 24 年（2012 年）の開始を目指していること、誘致による交付金によって、赤字解消政策に添って、平成 23 年度での累積赤字からの脱却も見えていと書かれている。

現状がどうなっているのか調べてみると、東日本大震災以降、建設工事を中止していたが、平成 24 年（2012 年）3 月に貯蔵建屋工事を再開し、使用済燃料貯蔵施設のうち、貯蔵建屋が平成 25 年（2013 年）8 月に完成し、リサイクル燃料備蓄センターに関わる新規制基準への適合確認等の審査を受けるため、原子力規制委員会に対し、事業変更許可申請中、平成 27 年（2015 年）3 月に事業開始予定とある（青森県 HP 参照 <http://www.pref.aomori.lg.jp/sangyo/energy/0001tyuukan.html>）。

2. 原子力＝核のこと

正直なところ気の重い作業ではあるが、下北と原子力＝核について触れておくべきだろう。かつての私のように、下北に縁のない人々は、知っているべきことをほとんど何も知らないだろうと思うからである。初めてむつを訪れる時、鎌田慧・斉藤光政『ルポ下北核半島～原発と基地と人々』を読んだ。衝撃的だった。著者は二人とも青森出身で、故郷への思いと憤りが滲み出ている。鎌田に言わせると、原子力船むつは建造に 73 億円、事故後

の受け入れのために、むつ市関根浜港が築港されるのに 340 億、そのほか附帯施設は 260 億円、総額 1500 億円を空費した「原子力行政に群れる欲望の象徴」である。むつ市は、これを実績として中間貯蔵施設の受け入れに名乗りを挙げた。港の裏山にあるコンクリートの建物には、34 体、ウラン換算でおよそ 4 トンの使用済み燃料が保管されており、2000 年をめどに東海村の再処理工場へ搬出される協定になっていたのに、約束は守られず、一部置き去りにされたままである。1999 年の補正予算では、市道整備事業として 1 億円が計上され、財源が「原子力船開発関連」となっており、むつの母港から、2800 メートルにおよぶ道路が計画されているという。

鎌田さんとは、20 年以上昔、世間を騒がせた少年事件をきっかけに新聞紙上で対談をしたことがある。時折、鋭い眼差しを見せるが、基本的に静かで控えめな紳士という印象だった。実は、もっとずっと前から、下北に関心を持って取材を続けていたわけだ。本当は、あの時、この話を聴いておくべきだったのだ。東日本大震災が起きるまで、54 基もの原発が日本に作られていたことを知らなかった自分を恥じ、悔いている。チェルノブイリは、はっきりと記憶しているし、広河隆一も読んだ。しかし、その関心を維持せず、正直に白状すると、それ以上考えることをどこかで敬遠してきたような気さえる。

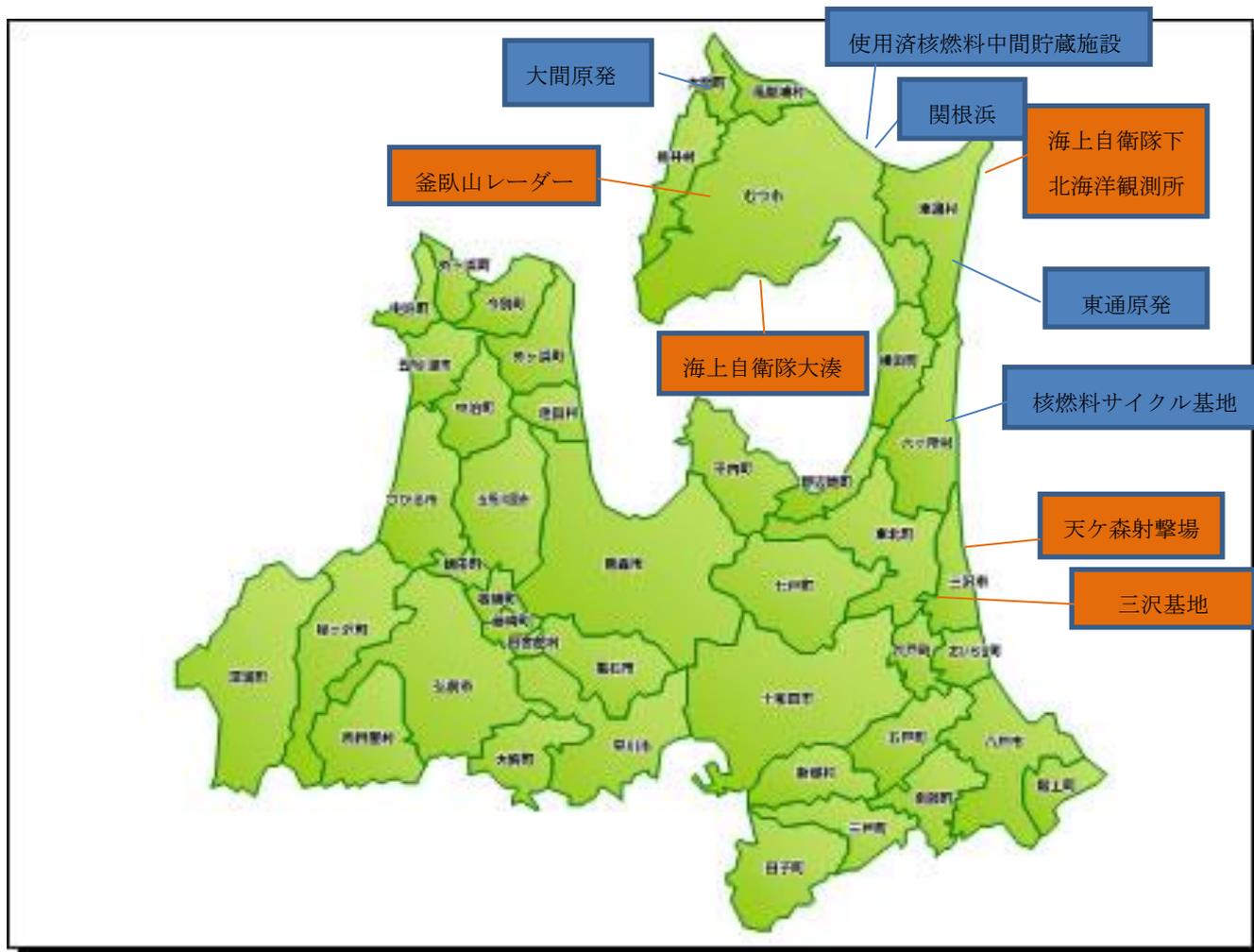
それはなぜだったのか。田口ランディ『ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ～原子力を受けた日本』を読んで納得するところがあった。田口は私とほぼ同世代であるが、反核運動に対してどうしても積極的になれなかったのは、反核運動が社会主義・共産主義と結びつけられ、うまく利用されていたためではないかと分析している。私たちが生まれた頃に第一次安保闘争があり、小学生の頃に学生運動が盛り上がっていた。あれは何だったのか、彼らはいったい何を革命したがっていたのか理解不能だった。団塊の世代は、大企業で高給を得ながら「24 時間闘えますか？」と歌っていた。反核も反原発も社会主義系、いわゆるアカ、原発推進は資本主義という雰囲気の中かで、世間の雰囲気を読むことに敏感な世代が、「あの人たちの運動は何だか怖い」と感じ、原発に反対であっても、そのことを表明することに躊躇があったと告白している。たしかに、学生運動の後に現れた政治的に無色な世代にとって（私たちは、大学のクラス新聞の名前を「白旗」にしようかと相談していたくらいだ）、それは、少なくとも「ダサイ」ものと感じられていたような気がする。

加納実紀代『ヒロシマとフクシマのあいだ～ジェンダーの視点から』を読むと、私たちが、どんなパワーポリティックスのなかに埋め込まれていたのかがよくわかる。広島・長崎への原爆投下から十年経った 1955 年、広島で原水爆禁止世界大会が開かれ、女性平和運動の中心である母親大会の第一回大会が開催された。その一方で、同じ年に、原子力基本法が成立、東京で原子力平和利用博覧会が開催されている。この博覧会は、その後、名古屋・大阪・広島など全国十か所を巡回したが、広島の会場は原爆資料館だった。考えてみると矛盾しているが、みな「原子力の平和利用」という表現に惑わされていたのだ。この表現は、1953 年、アイゼンハウアーが大統領就任時演説で、東西冷戦の中かで核戦争の危機と「原子力の平和利用 (Atoms for Peace)」を訴えたことに遡る。単なる核削減や廃絶だ

けでなく、国連下に原子力機関（IAEA）を置き、電力の乏しい地域に電力を供給しようという内容だったが、電力供給が平和というのは、どう考えても根拠に乏しい。

敗戦直後、昭和天皇は疎開先の皇太子に手紙を出し、敗因を「我が軍人は精神に重きをおきすぎて科学を忘れたことである」と綴った。「つくる会」元会長・西尾幹二は、学校の作文に、「・・・原子爆弾はすごい爆発力があって、その爆弾を使えば二、三日すると日本の本土の人員はなくなるそうです。・・・今、降伏しておいて又、敵と戦争し勝利をえるのだそうです。今度の戦争は科学戦だから、理数科をしっかりとって発明するのです。その任務は僕たちです・・・」と書いた（高橋、2002）。そして、元主計中尉・中曾根康弘は1951年、日本を訪問したダレス特使に原子力研究の自由を認めるよう文書で依頼、1954年には原子力開発を国策として起動させる。戦争責任を問うことなく、科学力の掌握こそが目標となった。1952年～1968年、鉄腕アトムが雑誌連載され、1963年～1966年、テレビアニメ化された。「心やさし、ラララ科学の子」鉄腕アトムは、私の記憶にもはっきりと残っている。ちなみに、この歌詞は谷川俊太郎である。

3. 下北半島



『ルポ下北核半島～原発と基地と人々』を参考に、下北半島の状況をまとめてみる。1969年、「新全国総合開発計画」が閣議決定され、そこに「むつ湾小川原湖開発」が含まれていた（後に、陸奥湾と小川原湖は開発から除外され、「むつ小川原開発」に改称された）。この「むつ湾小川原湖開発」は、当初、3万ヘクタールの用地買収、1万5千人の立ち退きという巨大開発計画で、むつ湾の太平洋側とその湾内、小川原湖周辺に、石油コンビナートや造船所などを配置しようとするものだった。国と県と財界150社が出資しあって、1971年、土地買収会社「むつ小川原開発株式会社」が創立された。『六ヶ所村史』年表によれば、

- 1970年 昨年来、県内外不動産業者による土地買占めが続き、その規模が1260人から870ヘクタールに及ぶ
- 1971年 土地ブームが続き、村内民有地の13%に当たる1780ヘクタールが売られ、長者番付にのる人も出てきたが、トラブルも目立ってきた
- 1973年 千歳地区は土地値上がりにより、この春、地価が3年前の200倍になる
開発地域内の弥栄平、幸畑など開拓地から他市町村へ移転する人が出始める

地価が3年で200倍である。六ヶ所村は、満州やシベリアから引き揚げてきた人たちが開拓し、畑や牧草が広がる土地だった。少なくとも、7つの集落、350戸が壊滅した。「むつ小川原開発株式会社」所有の時は、公有地を含めて5280ヘクタールに達したが、1973年のオイルショックで、会員会社の工場は一軒も姿を現さないまま、土地ブームは終わった。工業用地として造成した2800ヘクタールのうち、売却できたのが、日本原燃の750ヘクタールを含む1170ヘクタールだった。売れ残った膨大な土地を抱えるなか、「この頓挫したむつ小川原開発に救世主のごとく現れたのは、核燃料サイクル基地であった」「巨大開発の縮小で土地賠償などで膨大な借金を抱えており、核燃基地は、渡りに船だったのである」（『六ヶ所村史』）。1984年1月4日の東奥日報一面に、「むつ小川原 立地浮かぶ 核燃料サイクル基地」「ウラン濃縮 再処理 廃棄物貯蔵 電力業界中心に検討」の大ニュースが掲載された。

鎌田によれば、しかし、実は、それより15年も前から、六ヶ所村は「原子力産業のメッカ」と位置づけられていた。1969年3月、通産省の外郭団体「日本工業立地センター」が発表した「むつ小川原湖大規模工業開発調査報告書」は、「わが国で初めての原子力母港の建設を契機とし原子力産業のメッカになり得るべき条件をもっている。当地域は原子力発電の立地因子として重要なファクターである地盤および低人口地帯という条件を満足させる地点をもち、将来、大規模発電施設、核燃料の濃縮、成型加工、再処理等の一連の原子力産業地帯として十分な敷地の余力がある」としていた。「渡りに船」どころか、初めに目論見ありきだったということになる。1969年に六ヶ所村の村長となった寺下力三郎は、「開

発の内容が一切秘密にされていることは、明らかに民主主義の否定であるばかりでなく、開発そのものの危険性を物語っている」と批判、むつ小川原開発計画への反対を表明し、巨大開発反対運動の先頭に立ったが、1973年の選挙で開発推進派の古川伊勢松に敗れた。

日本原燃のウラン濃縮工場は1988年、低レベル放射性廃棄物埋設施設は1990年に着工され、1992年に操業開始。高レベル放射性廃棄物の貯蔵管理施設は1992年着工、1995年完成、核燃料再処理工場は1993年に着工、2006年に試運転を開始したが、事故続きで、MOX燃料工場は2010年に着工された。それぞれの状況は、青森県のHP「六ヶ所原子燃料サイクル施設の概要」で確認できる

(<http://www.pref.aomori.lg.jp/sangyo/energy/0001rokasyo.html>)。

六ヶ所村から泊街道を抜けると東通村がある。東通村議会が原発誘致を決めたのは1965年、1971年に原発用地の八割強を総額20億円で買収したが、8名が拒否したため、完全引き渡しはなされ、漁業交渉が終結するまでに20年もの歳月を必要とした。六ヶ所でも東通でも最後まで粘ったのが漁師たちだった。しかし、1988年から電源三法などによる交付金が入り始め、東北電力第1号は2005年に稼働した（現在停止中）。これについても、青森県のHP「東通原子力発電所」

(<https://www.pref.aomori.lg.jp/sangyo/energy/0002higasidoori.html>)で確認できる。

そして、大間。まぐろの一本釣りで有名な本州最北端の地である。大間に至る国道の左側にある鉄橋やトンネルの廃墟は、戦時中、連行された朝鮮人強制労働によって敷設工事が行われながら、ついに挫折した鉄道の名残だそうである。戦後、生き残った犠牲者たちが故郷に向かう途中、舞鶴沖で爆発事故を起こして沈没したのが浮島丸事件である。大間原発はプルトニウムを使うMOX燃料であり、プルトニウムを産み出す六ヶ所村の核燃料サイクル施設と一体化した原子炉だった。1984年に誘致決議するが、長く着工されなかったのは、大間や対岸の函館の市民グループが国と事業主の電源開発を相手取った訴訟を起こしたり、炉心建設予定地付近の土地を所有する地権者が最後まで買収に応じなかったりなど、粘り強い反対運動の結果だった。電源開発は2003年、用地買収を断念し、建設計画の見直しと原子炉設置許可申請の変更を強いられた。2008年ようやく着工、東日本大震災の影響で一時休止していたが、工事は再開されている。青森県HP「大間原子力発電所の概要」

(<http://www.pref.aomori.lg.jp/sangyo/energy/0001oma.html>)。

下北のリスクは原子力に留まらない。陸・海・空の三自衛隊と米軍の「四軍」が揃っているのは、沖縄と青森だけである。三沢基地は、米空軍、空自、民間航空の三者が共同使用する全国唯一の飛行場で、米空軍が戦闘機F16を40機、空自がF2を40機運用し、「世界中のどこでも24時間以内に攻撃できる態勢を整える」グローバル・ストライクをコンセプトとする。2003年のイラク戦争でバグダッド空爆一番乗りを果たしたのは三沢のF16で、その往復の飛行時間はなんと11時間だったという。その隣に天ヶ森射撃場があり、戦闘爆撃機が模擬爆弾を投下する直下に六ヶ所村がある。東通村の海上自衛隊下北海洋観測所は地図に載らない秘密基地であり、米海軍が世界中の海底に張り巡らせている潜水艦探知用

のネットワークの一部として、中国、ロシア、北朝鮮の潜水艦を監視している。2010年には、むつ市釜臥山山頂、大湊分屯基地にミサイル防御用の最新鋭レーダーFPS-5（通称「カメラレーダー」）が建設された。高さは40メートル、8階建てビルに相当するが、建築物の定義に該当しないことから届出はされていない。3000キロ以上をカバーできると言われ、北朝鮮、中国を視野に収める。

これが下北半島である。東日本大震災後、米軍と自衛隊は「トモダチ作戦」と称して、救援物資を運び、大いに活躍した。大型揚陸艦がむつ市の海上自衛隊大湊基地で北海道の陸上自衛部隊を陸揚げして、そのまま三陸沖に陣取り、原子力空母が配備された。米軍三沢基地には横田、岩国などの各基地から救援物資を満載した輸送機がひっきりなしに着陸し、物資はトラックに積み替えられると、すぐさま岩手、宮城に南下した。斉藤は、有事の時には、まったく同じ形で軍事拠点として活用されるだろうと考える。

4. 私たちはどこから来て、 どこへ向かうのか？

「いったいどうしてこんなふうになったのだろうか」と思っていたとき、「日本の近代国家建設における『東北』について」（篠田、2013）という論文に出会った。それによれば、明治政府が中央集権制を強化して近代化を急速に進めることができた背景には、戊辰戦争によって新政府への反対者が駆逐されていたことがある。東北は、戊辰戦争後、敗戦地と位置づけられ、薩長藩閥体制下で国家主導の産業化プロセスから見放されるという形で後背地の位置に追いやられていった。1874年の「府県物産表」によれば、東北の産業の生産額は全国平均だった。日本の軍国主義と高度経済成長の過程を通じて、東北は、資源と人材の供給地としての位置づけを梃子に、発展の道を見出した。今日に至る電力国家管理体制の仕組みの中で、電源地として国家システムに組み込まれることによって利益を享受するシステムを見出すようになったところの大震災だった。篠田（2013）は、中央集権制に過度に依存した復興は現代では限界があり、コミュニティの自立性だけを提唱することも現実的でない、日本における国民国家と地域社会との関係性の問い直しが求められていると提起している。

たしかに、靖国神社は戊辰戦争で設立されたものだったのではないか。そう言えば、またむつ市は会津若松市と姉妹都市の関係を結び、その絆は戊辰戦争に遡るとHPに書いてあった。戊辰戦争に敗れ、故郷を失った旧会津藩士とその家族1万7千人余が斗南の地に移住し、円通寺に藩庁を置き斗南藩を興した明治3年に遡る。その後、廃藩置県で藩士たちは全国に散りじりになってしまったが、今なお多くの子孫がここに住み、市政、経済ほか多くの分野においてむつ市発展の大きな力となっているのだそうだ。原発が東北だけにあ

るわけでないことを考えれば、戊辰戦争だけを理由にすることもできないが、東北に通っていると、都道府県の行政区分より、藩という概念に出会うことが多いような気がする。一種の文化区分と言えるかもしれない。東北のことを知るために、まずは、自然に触れ、土地の食べ物を食べ、温泉に入り、人々と出会いたいと思い、フィールドワークと称して旅して回っているが、県単位でなく、その土地土地に風土がある。

『ルポ下北半島』には、粘り強く反核運動を続けてきた人々の凜とした姿がある。鎌仲ひとみ監督『六ヶ所村ラブソディ』には、それぞれに個性的な普通の人々の姿が見える。故郷に帰り農業を続ける菊川恵子さんは、まずは生活を楽しみ、その一部で反核運動をするのだと、チューリップを育てて人々を招き、畑で採れた野菜を食べる。六ヶ所村の隣で無農薬の米を作る苦米地ヤス子さんは、お客さんたちから再処理工場が稼働したらもう買わないと言われても、「頑張れ、頑張れ」とお米に話しかけながら育て続ける。日本原燃の下請け建築会社で使用済み燃料の入ったキャスク搬入の仕事をする上野幸治さんは、3人の子どもを抱え、「仕事がないからね、子どもに飯食わせるために、なんでもやる」と言い、六ヶ所村でとまりクリーニングを経営する小笠原聡さんは、子孫の為にエネルギーを確保するには再処理工場が安全に稼働することが現実的だと訴え、岡山建設会長で六ヶ所村村会議員を務める岡山勝廣さんは、再処理工場の稼働にあらゆるビジネスチャンスを期待する一方で、酪農や風力発電にも力を注ぐ。

みな、それぞれ未来を模索している。中央集権的な国家システムに抵抗し得るしなやかで多様な草の根的な動きをどのようにつなげていけるのだろうか。答えは見えないが、一人ひとりと出会うこと、土地土地と出会うことを十年間続けるなかで何かが見えてくるのだろうか。

<文献>

鎌田慧・斉藤光政(2011)『ルポ下北核半島～原発と基地と人々』岩波書店

加納実紀代(2013)『ヒロシマとフクシマのあいだ～ジェンダーの視点から』インパクト出版会

篠田英郎(2013)「日本の近代国家建設における『東北』について」日本平和学会編『3・11後の平和学』早稲田大学出版

田口ランディ(2011)『ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ～原子力を受け入れた日本』ちくまプリマー新書

高橋哲哉(2002)「『過去の克服』と日本」『中帰連～戦争の真実を語り継ぐ』20号。



